

大賀蓮鑑賞会

と き 平成24年7月21日(土) 午前11時から

ところ 蓮池 ～ ビオトープ付近

参加者 平川地区の皆さま
ハス池整備プロジェクトの皆さま
山口大学教職員有志

ゲスト 源久寺住職 清木玄栄師

担 当 地域連携室 (933-5797)



大賀ハス鑑賞会開催にあたって

山口大学名誉教授

前保健管理センター所長 平田牧三

数年前から、山口大学では「キャンパスに心の癒しの場を！」のコンセプトで環境整備がされていて、春は桜、秋はコスモスや紅葉、冬は椿やサザンカですが、夏は夏枯れ状態でした。そこで、夏の楽しみとしてハスに想い至りました。ハスは泥の中から、清楚で一本咲きの凛々しい花を咲かせ、古来、仏の花、浄土の花として、又、平和の象徴ともされてきました。

ハスは多くの種類がありますが、2000年前の地層の中の眠りから覚め、現代に花を咲かせる古代ハスの大賀ハスを植えることにしました。

平成19年9月に丸本学長の親書を携えて、山口市仁保の源久寺に株分けのお願いに参上しました。「大学ならばハスの生育に詳しい人もおられるでしょう」と快諾を頂き、早速、「大賀ハスプロジェクト」を立ち上げて分植の準備にかかりました。ハス池の場所は大学正門前の九田川沿いの水田跡地としました。

平成20年4月3日に約50株を植えました。根づくのか、花は咲くのか、など心配しましたが、こまめに管理して、7月24日に10本の開花を見て、大変感動し、安堵しました。姫山からの谷水と土質が合ったのか、予想以上に繁殖力が強く、1年目は100本ほど開花し、翌平成21年11月には、更に池を広げて分植し、現在のハス池ができました。

この生命力とロマンあふれる蓮花を愛でる幸せを大学の学生、教職員だけでなく、地域の方々にも提供し、「心のオアシス」となることを願っています。蓮花の見頃は朝です。夏の風物詩として、散歩コースとしても、足を運んでいただければと思います。



写真提供 大学教育機構 何教授

山口大学の大賀ハスについて

大賀ハスとは、昭和26年に千葉市にある「東京大学検見川（けみがわ）厚生農場」の「落合遺跡」で発掘された2,000年以上前のハスの実から発芽・開花した「（古代）ハス」である。植物学者の大賀一郎博士（ハスの権威）が、発掘品の中にハスの果托があったことから調査を行い、ハスの実3粒を発掘し、発芽させたものである。



写真提供 大学教育機構 何教授

山口大学の大賀ハスは、丸本学長から要請を受けた平田牧三名誉教授（前保健管理センター所長・教授）が中心となり、山口市仁保の「源久寺」【注】から株を譲り受け、山口大学キャンパスの環境整備の一環として正門そばに植栽したものである。



写真提供 大学教育機構 何教授

平成21年11月9日には、丸本学長をはじめ教職員・学生だけでなく地元の人達も一緒になり、850㎡に約150株を分植した。

現在では、約300株（約1,000本）にまで増え、悠久の太古の眠りから目覚めた大賀ハスは、はるか2,000年前と同じ優雅な姿を見せ、山口大学構内の夏の風物詩として地域の人達の目を楽しませている。見頃は、7月中旬から8月中旬頃まで。

【注】

源久寺は鎌倉時代の建久8（1197）年、源頼朝の家来で仁保地方の地頭職として補任された平子重経が、頼朝の死後、源一族の末永い繁栄、すなわち「源家久昌」を祈願して建立したことに由来し、800年もの歴史を持つ古刹です。寺から少し下ったところに、大賀ハスが植えてあります。（詳細は、P10～14参照）

源久寺では、28年前の昭和59年に先代の住職が知人から3株を譲り受けて植えたものが、今ではハス池一面に広がっていて、毎年訪れる人の心を和ませているようです。

大賀ハス（スイレン科/ハス属）豆知識

大賀ハス（オオガハス）は、1951年（昭和26年）、千葉県千葉市検見川（現・千葉市花見川区朝日ヶ丘町）にある「東京大学検見川（けみがわ）厚生農場（現・東京大学検見川総合運動場）」の落合遺跡で発掘された、今から2000年以上前の古代のハスの実から発芽・開花したハス（古代ハス）のこと。

戦時中に東京都は燃料不足を補うため、花見川下流の湿地帯に豊富な草炭が埋蔵されていることに着目し、東京大学検見川厚生農場の一部を借り受け草炭を採掘していた。

採掘は戦後も継続して行われていたが、1947年（昭和22年）7月28日に作業員が採掘現場でたまたま1隻の丸木舟と6本の櫂（かい）を掘り出した。

このことから慶應義塾大学による調査が始められ、その後東洋大学と日本考古学研究所が加わり1949年（昭和24年）にかけて共同で発掘調査が行われた。

調査により、もう2隻の丸木舟とハスの果托などが発掘され、「縄文時代の船だまり」であったと推測され落合遺跡と呼ばれた。

そして、植物学者でハスの権威者でもある大賀一郎博士（当時・関東学院大学非常勤講師）が発掘品の中にハスの果托があることを知り、1951年（昭和26年）3月3日から地元の小・中学生や一般市民などのボランティアの協力を得てこの遺跡の発掘調査を行った。

調査は困難をきわめめぼしい成果はなかなか挙げられなかったが、翌日で打ち切りという30日の夕刻になって花園中学校の女子生徒により地下約6mの泥炭層からハスの実1粒が発掘され、予定を延長し4月6日に2粒、計3粒のハスの実が発掘された。

大賀博士は5月上旬から発掘された3粒のハスの実の発芽育成を、東京都府中市の自宅で試みた。2粒は失敗に終わったが3月30日に出土した1粒は育ち、翌年の1952年（昭和27年）7月18日にピンク色の大輪の花を咲かせた。

このニュースは国内外に報道され、同年11月17日付米国ライフ誌に「世界最古の花・生命の復活」として掲載され、博士の姓を採って「大賀ハス」と命名された。

また大賀博士は、年代を明確にするため、ハスの実の上方層で発掘された丸木舟のカヤの木の破片をシカゴ大学原子核研究所へ送り年代測定を依頼した。

シカゴ大学のリピー博士らによって放射性炭素年代測定が行われ、ハスの実は今から2000年前の弥生時代以前のものであると推定された。

自宅近く、博士の銅像が建てられている府中市郷土の森公園修景池には、この二千年ハスが育てられており、鑑賞会が催されている。

この古代ハスは、1954年（昭和29年）6月8日に「検見川の大賀蓮」として千葉県の天然記念物に指定された。

また1993年（平成5年）4月29日には千葉市の花として制定され、現在千葉公園（中央区）ハス池で6月下旬から7月に開花が見られる。

日本各地は元より世界各国へ根分けされ、友好親善と平和のシンボルとしてその一端を担っている。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E8%B3%80%E8%93%AE>

この文章は、ウィキメディア財団の規約に基づいて利用しています。

ライセンスは CC-BY-SA 3.0 です。

ハス池整備前（平成 20 年）の写真集



源久寺で蓮根掘り（平成 20 年 3 月 28 日）



蓮池整備、移植（平成 20 年 4 月 3 日）



移植後、初めての開花①（平成 20 年 7 月 24 日）



移植後、初めての開花②（平成 20 年 7 月 24 日）



移植後、初めての開花③（平成 20 年 7 月 24 日）



初年度は池の半分以上が
他の水草（平成 20 年 8 月 23 日）

平成 21 年度のハス池整備事業 写真集



平成 21 年 11 月 6 日 植え替え前の株



皆さんのおかげでようやくハスの根を掘り出しました





平成21年11月9日 株植えの日



応援団が勢揃い 今から植え付けです

丸本学長のあいさつでスタート



報道対応中の丸本学長



平川コミュニティ推進協議会米倉会長



財務施設担当 瀧口副学長の整備計画説明



学生代表あいさつ



施設環境部御手洗さんの株の植え方講習



平川地区のみなさんの応援もありました



平田先生は 黙々と作業中



丸本学長，瀧口先生もこの笑顔 次の日はさぞかし足腰が痛かったことでしょう



皆さんのおかげで植え付けがほぼ終了しました！

あれから1年たちました



平成22年6月29日撮影

【山口大学 web ページ：過去のWEEKLY NEWS】から

吉田キャンパス正門東側にオオガハス池を整備

掲載日：2009/11/20



11月9日（月）、丸本学長をはじめ学生、教職員、平川地区の方など約40人が参加し、吉田キャンパス正門東側の池に、オオガハスを植えました。これは、大学通りのケヤキ並木との調和やキャンパスの緑化・環境整備の一環として行われたもので、平川地区の方との共同作業によって地域との連携をより深めることも目的にしています。

続いて、ビオトープにて、ホタルの幼虫15匹の放流が学生によって行われました。来年の夏にはオオガハスの開花とともに、

ホタルの飛翔が期待されます。

今後、正門からビオトープ、大学会館、里山までの遊歩道・桜並木を整備し、地域の方に癒しの場・憩いの場として開放する予定です。

平川コミュニティ推進協議会会員へ吉田キャンパスを紹介

掲載日：2010/04/12



4月3日（土）、平川地区との連携活動の一環として、平川コミュニティ推進協議会会員の方に、吉田キャンパスの環境整備状況の紹介を行いました。

現在、吉田キャンパスでは、正門からビオトープ、大学会館、里山までの遊歩道・桜並木を「国際・社会連携ゾーン～コミュニティ広場」として整備しております。また、「桜花爛漫～維新伝心プロジェクト」として、寄付による桜の植樹も行っており、これは、地域の方々にも広くキャンパスを開放することを目的として

実施しているものです。

当日は、参加者全員で、オオガハス池から、長門市出身の彫刻家大井秀規氏の作品である里山の山頂のモニュメントまでを歩いて移動し、施設部長による整備状況説明を受けました。参加者からは、「キャンパスがとてもきれいになった」「モニュメントの形がおもしろい」など、生まれ変わったキャンパスを喜ぶ声が多く聞かれました。その後、キャンパス内の満開の桜を見ながら懇親会が開かれ、今後の大学と地域の連携の在り方について、積極的な意見交換が行われました。

源久寺 (清木玄栄住職) のご紹介

掲載資料は、源久寺清木住職から使用許諾済



源久寺 境内

源久寺由来

源久寺は山号を仁楽山と称し、曹洞宗で、本尊は阿弥陀如来、脇侍は不動明王、毘沙門天であります。

建久八年（一一九七）武蔵国を本拠とされていた平子重経公は、源頼朝から周防国の仁保庄と恒富保の地頭職に補任されて、周防国に下向されました。そして仁保の地へ居館を定められ、政務を執っておられました。正治元年（一一九九）源頼朝は鎌倉において没しましたが、重経公はその霊牌を安置するために寺院を建立されました。これが仁楽山源久寺であります。そして僧を請じ、尊霊碑を安置して頼朝の菩提を弔われました。源久という寺号は、源家の永久安泰繁栄の祝意を表してのことであるといわれています。

国指定重要文化財

木造平子重経（沙弥西仁）坐像

源久寺の開基重経公の像として伝えられてきたもので、高さ八十七・六センチメートルで等身大。樫材の寄木造、彩色、玉眼嵌入の像であります。重経公が剃髪されて西仁と号された晩年の姿を表したものです。現在、右前膊に補修、改変がありますが、当初は両手掌を内に向けて数珠を繰る姿であつたろうと思われれます。

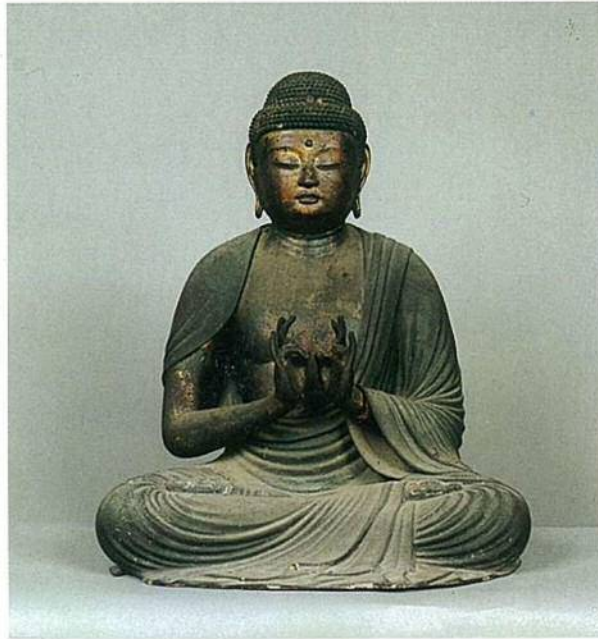
口を一文字に引結び、頬骨の張つた意志の強そうな面貌と、背筋をのばして端坐する姿勢に力がこもっています。胸から腹へと量を増す骨格たくましい体軀はいかにも激動期に生きた武人の姿を彷彿させます。また曲つた鼻梁や口許など、像主の身体的特徴が生々しく表現されています。両腋や両臂外側など、衣文の各所の深い彫り込みにより像に動感と立体感が与えられ、その衣文の処理が、いまだ形式化に陥らぬところに生き生きとした力



平子重経（沙弥西仁）木像

強さも看取されます。こうした点や頭体軀幹部を通して正中線で左右二材を矧ぎ寄せ、割首とする技法から見ても鎌倉時代初期、つまり重経公が逝去された貞応三年（一一二四）からあまり時を隔てない時期に制作されたものと推定されます。なお玉眼は前面から嵌入されていますが、これは類例を見ない技法です。鎌倉時代には肖像彫刻がいくつも作られています。この像は荒々しく、力強い作風を示しており、鎌倉時代肖像彫刻の異色作といえましょう。

この重経公木像は、平成三年秋に、イギリス、ロンドンの大英博物館で開催された「鎌倉彫刻展」に、日本の肖像彫刻を代表して出品展示されました。周防山寺の木像が、世界の晴舞台に飾られたということは、特記すべきことです。重経公木像は、平成四年、六月二十二日に国指定重要文化財となり、その後京都国立博物館内の美術院に於て虫くいなどの修理がなされました。



阿弥陀如来坐像

山口県指定有形文化財

木像阿弥陀如来坐像

源久寺の本尊であります。像高は四十三・二センチメートル。寺伝ではこの如来像は、平子重経公が鎌倉から迎えられたものと伝えてあります。像風は、非常に穏やかな面相を見せ、小像ながら極めて手慣れた技量が見られます。衣文は細かく流れるような褶波を刻み、頬・胸部に若々しい張りのある肉感が見られます。制作年代は平安時代末と考えられます。

両手を胸前にして印を結び、両手とも一指と四指を捻じて下品中生の形です。この手印は、説法印ともいわれます。下品中生の印を結ぶ如来像は全国的にみても例がすくなく、この像がつくられた平安時代末期頃に一つの流行が見られるといわれています。

また本像の胎内には金箔が押されていますが、これはたいへん丁寧なやり方で、当時の仏像で皇族に縁の深い作品にいくつかあるという程度です。この様な注目すべき手法がみられるこの仏像は、重経公の依頼により、中央仏師が造ったものと考えられます。

山口県指定有形文化財

石造宝篋印塔

源久寺の参道脇にあり、古来から平子重経公のお墓と伝えられています。凝灰岩製で高さは一・六メートル。その下に二段の基壇があります。基礎は四方とも無地ですが、その上部に反花を刻しています。この反花は複弁の中に、さらに隆起をつくった丁寧な式で、深い線を彫り、おだやかな美しさを示しています。塔身には梵字などは全くありません。

笠の隅飾は二孤で、外線は軒に直立して古風です。笠下端は二段、上方の段型は六段ですが、上部にゆく程段がひくくなっているのは行届いた手法です。相輪は伏鉢の上に線刻の高い請花があり、その上に九輪を作っています。九輪は九つ残っていますが、その上部の請花・宝珠は欠失しています。

重経公の没年は貞応三年（一二二四）ですが、この宝篋印塔は形式上からみて、没後すぐの建立とは見られず、それよりすこし時代は後のものと考えられます。年号などの刻銘はありませんが、全体に鎌倉後期の形式をよく示している、形のおだやかな塔で、おそらく宝篋印塔としては、県下で最も古いものであろうと思われます。



石造宝篋印塔

山口県指定有形文化財

仁保弘有画像

仁保弘有は、仁保氏十四代目の当主で、平子重経公の末裔です。平子氏は後に仁保氏を称しました。仁保氏全盛期はこの弘有の時代といわれています。応仁元年（一四六七）妙法院庁から周防楊井本庄の代官職に補任されましたが、その後にも多くの所領がありました。応仁の乱に際しては、大内政弘に従って上洛し、西軍に味方して戦いましたが、政弘から度々感状をうけました。その後弘有は東軍に應じ、將軍足利義政に褒されています。明応八年（一四九九）に没しましたが、行年は不明です。



仁保弘有画像

「志」つなぎ伝える
二百年



—— 創基200周年 ——

山口大学